

2008（平成20）年度 京都大学 入試問題 理系 第2問 解答例

問一

本物・偽物については、偽物という言葉の方が重く圧迫的で決定的な気がするので、筆者は真偽がやや疑問な自分の蒐集品を本物と言われても、あまり心が動かないということ。

- * 「これ」の指示内容（「自分の蒐集品でやや疑問に思うものを本物と言われること」）を解答に明示することは最低限の必須ポイントである。

問二

偽物であるという否定の方が本物であるというより強く、権威的であるため、正真正銘の本物であっても、視野の狭い鑑定家によって偽物と判断された以上は、古徑にとって自作は不出来な作品であると思われ、謙虚に恥じる気持ち。

- * 「おはずかしい」という古徑の言葉は、筆者が「古徑さんの謙虚な言葉」と評している通り、「謙虚なので恥ずかしいと思う」のであって、反対の「恥ずかしいけれども、謙虚に認める」のだと誤読しないように。

- * 古徑画伯の事例は、本文中の「せまい目で見られると、出来の悪い本物は、偽物にされてしまう」ことの典型として挙げられているので、この要素を書き忘れないように。

問三

近頃は書画骨董でも日常生活の中でも、一流と評されるものは、形態だけ本物でも内実は偽物同然で、全般に劣化したが、二流、三流と評されるものは、充実した偽りのない内容で、本物と評されるに値する精神が残されているということ。

- * 「一流／二流・三流」は、書画骨董にも日常生活のさまざまにも、そして「人間様」にも適用される区別であるから、解答表現としては、「一流品／二流・三流品」という「品」の語を用いないこと。同様に、述部の解答表現としても「矜持を保っている」の置換が「誇り高い・自負する」といった擬人法になってしまわないように注意すること。

- * 「一流の墮落」と「二流・三流のその本来の矜持」との、単なる辞書的な置換で終わるのではなく、それぞれ本文内容を踏まえた「説明」（「形態だけ本物でも内実は偽物同然」／「充実した偽りのない内容」）を記すこと。